

学科 管理栄養学科	氏名 内田友乃
-----------	---------

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、子どもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1 教育の責任

私は、本学家政学部管理栄養学科専任教員として、2026年3月の時点で15年（途中20か月休職）勤めている。これまでに、オムニバス科目を含めて13科目担当してきた。

2025年度担当科目			
科目名	開講期	受講者数	備考
解剖生理学Ⅰ	1年前期	66	専門基礎分野（管理栄養士・健康運動実践指導者必須）
解剖生理学Ⅱ	1年後期	60	専門基礎分野（管理栄養士・健康運動実践指導者必須）
解剖生理学実習Ⅰ	1年後期	58	専門基礎分野（管理栄養士・健康運動実践指導者必須）
解剖生理学実習Ⅱ	2年前期	60	専門基礎分野（管理栄養士・健康運動実践指導者必須）
管理栄養士への道	1年前期	60	オムニバス 初年次教育
他オムニバス科目5科目（管理栄養士特論、専門実践実習（疾病予防分野）、潜在能力の開発等）			

その中でも管理栄養士に必要な専門能力の基本となる知識・技能に係る科目を主に担当しており、人体の構造と機能及び疾病の成り立ちの分野の「解剖生理学」を中心に、座学と関連する実習を担当している。これらの基本の知識・技能を身につけることで、様々な職域で活躍できる管理栄養士の礎になると思い教育に従事している。また初年次教育にも関わり、管理栄養士としてのキャリア形成を低学年より支援している。また2023年度からは、大学学生委員長を務めた。その他、大学運営委員、学生募集委員、学びの泉開発委員、内部質保証委員、3つのポリシー策定委員を担当し、学外では、健康おかざき21計画推進協議会委員、岡崎市食育推進専門委員および岡崎市食育推進委員を務めている。

2 教育の理念と目的

栄養学の専門的知識および技術を統合し、課題に対して必要な情報を収集・選択し、科学的視点を持って論理的に判断し、健全な発育・発達、健康の維持・増進、疾病の発症予防・重症化予防、治療に貢献できる管理栄養士を養成したいと考えている。自身は基礎的な科目を担当することが多いため、まずは、人体の構成・しくみの基礎や、正常な状態の体内の変化を理解できるよう、分かりやすい授業展開を心掛けている。中学校や高校までの理科や生物の学修の上にある科目であることから、得意不得意が出やすい科目ではあるが、将来管理栄養士として対象者に対して、個人に合ったより適切な栄養ケアプランを実践する必要があるため、他者に対して説明することで学生自身の理解を深められるように意識している。

3 教育方法

講義科目では、① 授業シートと呼ばれる〈予習・本時の授業・復習〉を A3 一枚で実施する、オリジナルの授業用シートを作成し、活用している（添付資料 2）。予習では、提示した教科書を調べれば簡単に回答できるものとしているが、より主体的な学修を促すため、教科書以外の出典にも目を向けさせている。そして、必ず出典を明らかにし、振り返って学修できるようにしている。② 知識を授けることを中心に実施しがちであるが、授業内で 2～3 つの問いを設け、学生に考えさせ、他人と共有する時間を作っている（添付資料 3）。具体的には『～についてまとめ、説明しなさい』などの問いに対して、他者と相互に説明しあって、理解を深める工夫をしている。③ 授業内で疑問に思ったことを自ら調べられるよう、疑問点などを記載する欄も設けている。④ 授業の最後に、『授業後テスト』ということで、授業内の理解を確認するための○×式問題を回答させる。×の問題を中心に復習をし、翌週『復習テスト』を実施し、知識の定着を図る工夫をしている（添付資料 4,5）。④ 復習時に本時の授業を理解しているかを確認するための演習問題を各自作成させている。單元ごとにグループで演習問題を作成し、受講者全員で共有し、さらに分かりやすい解説を作成させ、その中から期末試験問題の一部を出題している。受講者全員で協力して理解する、授業を展開することを促している（添付資料 6）。実験実習科目では、講義同様、⑤ 授業シートを用いて実験方法の理解や結果の考察に必要な見解を調べるように促している。⑥ 学生は実験のテーマごとにレポートを作成し、実験結果を基に、人体の構造や様々な調節のしくみについて理解を深められるようにしている。また、グループでの発表機会も設け、様々な方法を使用し、受講者全員で協力して理解する体制を作る努力をしている。なお、授業シートやレポートについては、添削してコメントを付け、返却している。

4 授業改善の活動

担当する全科目の授業アンケートを活用し、授業改善を行っている。リフレクションペーパーに授業に対する教員の課題を抽出し、具体的な改善案を明記し、学生にフィードバックしている。近年、従来の PCR（予習・本時・復習）シートをブラッシュアップし、思考の質を高める工夫をしている。また、自学を促すため、授業スライドを Google Classroom に授業前に提示するようにしている。事前にスライドの内容を PCR シートに記載してきている学生は、授業内容の理解が良いという状況が見られているが、前日までに提示して欲しいという要望が 2025 年あったため、次年度からより早めに提示するように改善したい。実習のレポートについては、2023 年から評価項目とレベルを事前にループブックを配布し、レポート内容として求めるものを提示するようにした。それに加えて PCR シートに考察のために必要な知識を確認できる項目を追加して、ループブックと PCR シートによって、質の高い学びに繋がる工夫をしている。2025 年度は生成 AI による回答の転記が疑われる事例が発生したため、「班ごとの固有データ」に基づいた文脈依存型の考察を必須とする形式へレポート課題を改善して予定でいる。

5 学生の授業評価

担当するすべての科目で授業評価アンケートを実施した。2025 年度は、多くの科目で昨年度を上回る高い評価を得ることができた（添付資料 8,9）。以下に概要をまとめた。

理解度と成長の実感：「解剖生理学Ⅱ」で、成長の実感（問 11）が 3.87 から 4.46 へと大きく向上した。また、「解剖生理学実習Ⅰ」でも成長の実感が 3.75 から 4.54 へ、目標の理解（問 6）が 3.78 から 4.44 へと飛躍的に改善した。

授業運営への高い満足度：シラバスとの整合性や教員の話し方については、多くの科目で 4.7 前後の極めて高いスコアを維持していた。

個別指導の評価「卒業研究」で総合満足度が 5.00（満点）であり、親身な指導や教員との良好なコミュニケーションが学生から高く評価されていた。

6 学生の学修成果

1. 学修時間と学習行動の変化

授業評価アンケートから、「解剖生理学実習 I」の復習時間は 115.17 分から 66.04 分へと減少した。PCR シートの活用による効率化が一因と考えられる一方、生成 AI の利用により思考過程が省略されている可能性もある。今後は学修時間の“量”だけでなく、“質”の確保が重要となる。

2. 主体的学修態度の向上

卒業研究の自由記述から、学生が「自ら計画し実行する姿勢」を身につけつつあることが確認できた。基礎科目での学修経験が、主体性の育成に寄与していると考えられる。

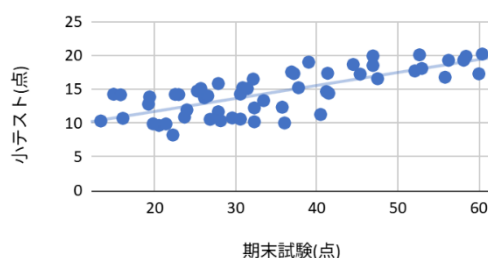
3. 基礎知識の定着

1 年次の基礎科目では、学習目標の理解度が向上しており、国家試験に向けた基礎力が着実に形成されている。授業後テストと復習テストを組み合わせた学習サイクルが、知識定着に一定の効果を示している。

4. 成績評価の傾向と課題

解剖生理学 II の成績は S 14%、A 11%、B 12%、C 30%、F 6% で、昨年度は、S 9%、A 22%、B 28%、C 36%、F 5%であった。全体として成績が上昇しているものの、二極化が進んでいることが分かった。小テスト平均は 14.6 点で、期末試験との相関係数は 0.721 と中程度の正の相関が認められ、日々の学修が成績に影響していることが確認された。難易度は維持しつつ、質問しやすい環境づくりやピアラーニングの導入により、学修の底上げを図る必要がある。

期末試験と小テストの相関



5. 今後の改善方針

以下に挙げる 4 項目を重点的に改善に取り組みたい。

- ・学修の質を高めるための AI 活用指導
- ・質問しやすい環境整備
- ・学生同士の学び合いの促進
- ・授業後テストを活用した学習サイクルの継続

7 授業科目に関連した教材開発

授業内容に合わせた PCR シートを毎時間作成している (添付資料 2)。また、授業後テストや復習テストを作成して、学生に実施している (添付資料 4,5)。必要に応じて、分かりやすい図を示すなど、補足説明のプリントを用意している (添付資料 7)。

8 指導力向上のための取り組み

本学が主催する FD 研修会に参加し、教育改善の方策のヒントを得ている。FD 研修会への参加記録は添付資料 10 に示す。また毎年開催の公開授業を参考にし、他の先生方の手法を参考に授業改善を行っている。学外では、教育実践に関する研究・事例を報告した論文や紀要を参考にしている。また授業内容に関連する動画等も見て、どのように説明すると学生に分かりやすいか、中学校や高校まででどの程度学んでいるかの確認に利用している。また、学外においては、研究活動は卒業研究をはじめとする授業の指導力向上につながると考え、学会発表等にも積極的に取り組んでいる。さらに、健康運動指導士養成講習会の講義も担当して、指導力向上に努めた (添付資料 11)。今年度は学会発表 1 回、国内雑誌 1 報 (共著・査読無)、学科内の研究会誌 1 本の執筆に取り組んだ (添付資料 12-14)。

9 今後の目標

全体の指導の目標として、管理栄養士を目指す学生にもっと人体の構造や機能に興味を持ってもらえるような、より楽しめる授業展開を考えていきたい。その上で、以下のことを重点的な目標として取り組んでいきたい。

AI 共存時代の思考力育成：生成 AI を「代行ツール」ではなく「補助ツール」として正しく使いこなしつつ、最終的には自身の言葉で論理的に考察できる能力を全学生に定着させることを目指す。

個別対応と到達目標の徹底：全体的な評価は向上しているが、依然として「目標の理解」等で「どちらともいえない」と回答する層 (約 6~10%) が存在するため、巡回指導やフィードバックの質をさらに高め、一人も取り残さ

ない指導を継続する。

評価の妥当性と公平性の追求：学生からの要望が寄せられている小テストの時間配分や問題量の適正化を行い、学生が自身の努力を正当に実感できる評価体制を構築する。

10 添付資料

添付資料1「シラバス」、添付資料2「PCRシート①」、添付資料3「PCRシート②」、添付資料4「授業後テスト」、添付資料5「復習テスト」、添付資料6「演習問題」、添付資料7「補足説明プリント」添付資料8,9「リフレクションペーパー」、添付資料10「FD研修会への参加記録」、添付資料11「令和7年度健康運動指導士養成講習会講義資料」、添付資料12「一般社団法人日本調理科学会 2025年度大会要旨集」、添付資料13「食と医療 秋冬版 35,13-20」、添付資料14「研究会誌原稿」